



# 小さなステップが 大きな夢を実現する

大平貴之 Ohira Takayuki

私がプラネタリウム作りを始めたのは、小学校4年生くらいだったでしょうか。単純な好奇心で、夜光塗料を紙に塗って壁に貼ってみたら夜空のように見えるのではないかと、という発想が原動力でした。実際にやってみて、想像以上にきれいな星空が現れたのを見て感激し、製作にのめり込むようになりました。しかし、夜光塗料の星は壁に固定されていて動くことはありません。動く星空を作りたくなり、本の付録をもとにピンホール式プラネタリウムを作り始めた頃は、すでにプラネタリウムのとりこになっていたと思います。ほかにも写真の焼付けや天体望遠鏡の製作、天体観測や撮影、鉱物採集、そしてロケットの製作や組み立てにいたるまで、いろいろな分野に興味を持ち、自ら取り組んできましたが、高校時代ぐらいから次第にプラネタリウムに収斂しゅうれんするようになっていきました。

数ある興味の対象の中で、プラネタリウムが私にとって特別だった理由のひとつは、プラネタリウムが幅広い分野の知識や技術の集大成で成り立つものだったからです。いわば、ほかの分野で学んだり体験したことを活かせるのです。たとえば写真の焼付けで学んだ知識が、星の原板を作る技術に結びつき、ロケットの製作で学んだ技術が、プラネタリウムの小型軽量化の技術につながりました。そして、理由のもうひとつは、プラネタリウムが人に見てもらい、感動を与えられるものだったからだだと思います。自分で作り上げた星空が、多くの人を包み込み、その空間で同時に感動を共有できる。高校の学園祭では、初めて教室に小型のドームを組み立て、一般のお客さんに向けて公開し、自らマイクをもって解説にも挑戦しました。それが自ら作り上げたものを、自ら動かして表現するという喜びの原点になりました。

こうした魅力にとりつかれ、高校時代にはピンホール式の1号機、2号機を完成、大学では4年間かけてアマチュア初のレンズ式プラネタリウム「アストロライナー」を完成させました。これらは大学卒業後、大幅に小型化し恒星数を一気に100万個以上に引き上げた「メガスター」につながりました。

「メガスター」を見た人によく聞かれるのが、「よくここまであきらめないで作り上げましたね。あきらめない秘訣は？」ということです。そのとき私は「あきらめる必要のないような、実現可能な課題に取り組んだだけです」と答えます。確かに何も経験のないところから「メガスター」を作り上げようと思ったら、途方もないことのように思えるかもしれませんが、子どもの頃から自分の手の届く範囲で目標を設定し、それが実現すると、そこまで学んだ知識と経験を活かしてさらに次のステップに進む、そういう小刻みなステップをのぼり続けてきただけなのです。私は「どんな夢も叶う」などとは思いません。自分は何が得意なのか？ 何が好きなのか？ おぼろげにでも自分の適性を見極め、自分で定めた目標に向けて、小さなステップでも着実にのぼり続けることが、夢を実現する秘訣ではないかなと思います。



メガスターII

## おおひら たかゆき

1970年神奈川県生まれ。(有)大平技研代表取締役、東京大学特任教員、和歌山大学客員准教授。1998年に個人で完成させた「メガスター」では従来の約100倍の恒星を投影することに成功した。400万個以上の星を投影する「メガスターII」は、『世界で最も先進的なプラネタリウム』としてギネスワールドレコードに登録されている。